



北京日本学研究中心 编

日本学研究

二十六

學苑出版社



北京日本学研究中心 编

日本学研究

二十六



學苑出版社

图书在版编目 (CIP) 数据

日本学研究. 二十六 / 北京日本学研究中心编. —
北京: 学苑出版社, 2016. 10

ISBN 978-7-5077-5118-5

I. ①日… II. ①北… III. ①日本—研究—丛刊
IV. ①K313.07—55

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2016) 第 258646 号

责任编辑: 杨 雷

出版发行: 学苑出版社

社 址: 北京市丰台区南方庄 2 号院 1 号楼

邮政编码: 100079

网 址: [www. book001. com](http://www.book001.com)

电子信箱: [xueyuanpress@163. com](mailto:xueyuanpress@163.com)

销售电话: 010-67675512、67678944、67601101 (邮购)

经 销: 新华书店

印 刷 厂: 北京京华虎彩印刷有限公司

开本尺寸: 787×1092 1/16

印 张: 37

字 数: 550 千字

版 次: 2016 年 10 月第 1 版

印 次: 2016 年 10 月第 1 次印刷

定 价: 100.00 元

本书由

日本国际交流基金
资助出版

《日本学研究 二十六》编辑委员会

主 编：徐一平 笠原清志

编 委：郭连友 周维宏 施建军
 秦 刚 朱桂荣 葛东升
 潘 蕾

执行主编：潘 蕾

前言

北京日本学研究中心成立于1985年,在迎来“而立之年”的2015年金秋,纪念北京日本学研究中心成立三十周年国际学术研讨会“亚洲日本研究的可能性”在北京外国语大学隆重举行。中国教育部代表、日本驻华使馆代表、日本国际交流基金代表、北京外国语大学学校领导、专家学者、高校教师、学生、媒体人士近两百人参加了此次研讨会,会上,来自中日韩三国的专家学者进行了激烈的思想碰撞与深入的学术交流。本期《日本学研究》特设了“纪念北京日本学研究中心成立三十周年国际学术研讨会”专栏,力求将研讨会取得的丰硕成果呈现给从事日本学研究工作的各位同仁。

与往年一样,本期《日本学研究》面向国内外的日本学研究者广泛征集稿件,共收到投稿论文五十四篇,其中包括纪念研讨会论文二十七篇,一般投稿论文二十七篇,经过专家们的匿名评审,最终采用了十八篇纪念研讨会论文、十六篇一般投稿论文。对于部分修改后可以采用的稿件,受篇幅所限,我们不得不割爱,但是将在下一期征稿中给予优先考虑。

本期收录的三十六篇投稿论文中,包括纪念研讨会基调报告两篇、研讨会专题论坛论文七篇、研讨会分科会论文九篇、一般投稿论文十六篇,研究内容涉及日本语言、日语教育、日本文学、日本文化、日本社会、日本经济各个领域。论文作者中,既有在日本学研究领域享有盛誉的著名学者,也有刚刚踏上工作岗位的青年科研工作者,还有在国内外高校攻读日本学研究相关学位的学生,可以说,这些论文基本上反映出了近三十年来日本学研究的发展进程与研究现状。此外,本期《日本学研究》还刊登了六篇北京日本学研究中心2016届毕业生的优秀硕士论文。

北京日本学中心的三十年,在人才培养、对外交流、社会服务等方面取得了一定的成绩,今后我们将进一步发扬严谨扎实的研究学风和务实奉献的工作作风,以更加开阔的国际视野和勇于创新的奋斗精神,为加强中日两国人民之间的文化理解而努力。我们坚信,在未来的三十年中,《日本学研究》作为增进两国人民文化理解的平台会继续发挥其应有的作用。

北京日本学研究中心
《日本学研究》二十六编辑委员会
2016年6月

目 录

纪念北京日本学研究中心成立三十周年国际学术研讨会 “亚洲日本研究的可能性”

基 调 报 告

大平正芳追想

—北京日本学研究中心 30 周年を記念して— …………… 竹内信夫(3)

中日古代文化关系的政治框架与本质特征 …………… 严绍璦(13)

专 题 论 坛

「東日本大震災と日本社会の変容」

“村落自治”中的国家在场

——日本宫城县仙台秋保町马场村的田野调查 …………… 李 晶(25)

「文学に表象された戦争」

日本における戦争の文学と「軍記物語」 …………… 佐伯真一(35)

「大戦争」と「女性」の眼差し

—太平洋戦争開戦時の太宰治の短篇から— …………… 島村輝(46)

茨木のり子詩考察

—戦争表象を中心に— …………… 徐載坤(57)

「多様な視点から考える日本語教育研究」

コーパスの活用から見た日本語教育研究 …………… 砂川有里子(68)

「東アジアにおける孟子受容」

徳川日本における『孟子』受容 高橋恭寛(81)

「シルクロードと日本研究」

鄭和と「一帯一路」 上田信(95)

日本語分科会

关于汉语中名词性非主谓句的语用功能及日译研究 刘雅静(107)

「自己引用」表現の談話機能と形式

—日本語教育の観点から— 遠山千佳(117)

不満表明に関する日中対照研究

—映画・ドラマを素材に— 杨 虹(132)

日语教育分科会

民国时期日语教材的发展及特点 张金龙 李友敏(149)

中日教育文化交流のあり方に関する一考察

—大平学校から見てきたこと— 孙晓英(157)

ipad 在大学日语教学及科研中的应用 张文颖(172)

日本文化分科会

山鹿素行『武教全書』とその展開 中嶋英介(183)

日本経済分科会

外資系小売企業の創造的適応による競争優位

—日系小売企業の中国事例を通して— 金 琦(197)

小売業から見た近現代日本の老概念の変遷

—百貨店を通じて— 加藤諭(211)

日本语言研究

大学基础阶段日语教材的词汇分析

——以日语外来语为例 譙 燕(231)

中国語を母語とする日本語学習者の漢語と和語の連語形式の習得に及ぼす母語の影響

——モンゴル語を母語とする日本語学習者との比較から——

..... 小森和子 三國純子 徐一平(240)

「ただ」の副詞機能と接続詞機能の連続性 曹彦琳 (259)

照応形としての三人称普通名詞の生起条件に関する考察 崔広红(268)

非協調性からみた日本語の命令表現

——従来でいう「反語命令」への記述的な試み—— 揣迪之(282)

日语教育研究

关于 20 世纪 30 年代中国人编写的日语教科书的研究

——以《日本语法例解》为例 朱桂荣(297)

中国人中級学習者の日本語漢字単語の中国語口頭翻訳における心内辞書の働き方

——聴覚呈示事態による中日間の形態・音韻類似性の影響—— 费晓东(311)

中国人非専攻日本語学習者の学習動機の変化

——中国における大学の日本語双学位学習者を対象に—— 王 俊(320)

『新編日本語 1-4』における敬語の扱いに関する一研究

——ポライトネス理論とディスコース・ポライトネス理論の視点から——

..... 李 瑶(336)

日本文学研究

北京での坪田譲治

——戦時下における日本児童文学の一側面—— 刘 迎(355)

宮沢賢治文学における自己犠牲と武士道思想

——「グスコーブドリの伝記」を中心に—— 阎 慧(367)

日本文化研究

岡倉天心の『茶の本』に関する一考察 叶晶晶(383)

日本社会研究

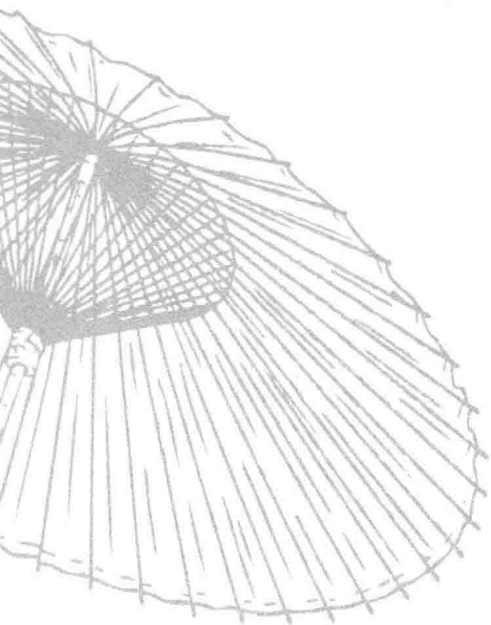
- 关于日本福岛核事故原因的失败学思考 俞晓军(395)
- 日本智库对华认识的最新动态分析
——聚焦近五年来日本国际问题研究所发布的研究报告书 姜 瑛(408)
- 21 世紀初頭における日本経済界の対中認識 卢永妮(419)

日本经济研究

- パート活用の高度化に対する実態研究
——第三次産業の企業調査を中心に—— 刘 婷(429)

2016 年度优秀硕士论文

- 中日広告表現の対照研究
——談話分析の角度から—— 滕 越(443)
- 中国日本語学習者と日本人教師との異文化葛藤の原因帰属と解決方略
..... 袁 茜(466)
- 「ひかりの素足」から「銀河鉄道の夜」への変奏
——少年の異界体験を中心に—— 李凯夏(488)
- 内藤湖南の中日関係構想
——ワシントン大会前後の時局論説を中心に—— 秦潇潇(507)
- 地域活性化におけるソーシャル・メディアの役割 刘兆媛(523)
- 执政党对日本公共投资地区间分配影响的实证研究 刘思言(548)
- あとがき (573)
- 『日本学研究』投稿規定 (574)
- 『日本学研究』執筆要領 (575)
- 《日本学研究》征稿启事 (577)
- 《日本学研究》撰稿规范 (578)
- Contents (580)



纪念北京日本学研究中心成立三十周年国际学术研讨会
“亚洲日本研究的可能性”

基 调 报 告

大平正芳追想

—北京日本学研究センター 30 周年を記念して—

(日本) 東京大学 竹内信夫

皆様、こんにちは。わたくしは、竹内信夫と申します。本日は北京日本学研究センター設立 30 周年を記念する集まりにお招きいただき、まことにありがとうございます。不思議な縁で、わたくしはセンターが設立されて間もなく、わたくしの記憶では 2 年ほど後のことだったのでしょうか、センターと出会うことができました。その当時の主任教授を務めておられた厳安生先生に紹介され、厳先生に案内されて初めてセンターと対面いたしました。当時は北京外国語大学の西院、センター職員の住宅区域になっておりましたが、その一画にセンター校舎はひっそりと立っていました。大学付属の幼稚園と、構内道路を挟んで、向かい合うところにそのセンター校舎がありました。その配置が私にはとても印象深い記憶として、今も鮮明に残っています。園児の声がにぎやかにセンターを包んでおりました。今でもその園児の賑やかな声は私の耳には聞こえています。それが私の、北京日本学研究センターとの最初の出会いです。

その後まもなく、わたくしは派遣教員の一人としてセンターに再び来る機会を与えられました。そして、きらきらと輝く目をしたセンターの学生さんたちと出会いました。その時の講義、講義と言うよりも日本の大学で言うところの演習と言ったほうが適切だと思います。それはさておき、私が初めて行ったその演習のテーマは、唐王朝の時代に日本国の派遣研究生として唐の都、長安に留学生として滞在した円仁という仏教僧についてでした。

円仁には、皆様もよく御存知だと思いますが、『入唐求法巡礼行記』という著作があります。ある意味では日本人の中国留学の記録なのです。その著作は漢文で書かれておりますから、センターの学生さんにはスラスラと難なく読めるテキストだから、よいかなと思って私は選んだのです。しかし、センターの学生さんたちのまず学びたいことは、日本語でした。というわけで、これは私のセンターでの失敗談ということで終わりました。

それはそれといたしまして、そのすれ違いの演習とは別に、学生さんたちとは近くの店で一緒にテーブルを囲んで昼の食事をとりながら、センター学生さんたちの生活状況や、さまざまな要望などを聞かせてもらいました。ざっくばらんな談話のなかで、センターでの生活のこと、中国近辺の景勝地のこと、それぞれの出身地の自慢話など、そこから多くのことをわたくしは学ぶことができました。

時には、バスを借り切って、一緒に郊外の遠足にも出かけました。戦争博物館な

どにも案内してもらって、軍国日本の恥ずべき行状の展示なども大いに勉強になりました。この後にも話しますが、私の戦争体験、私の場合は日米のいわゆる「太平洋戦争」の体験ですが、重なり合うことも多く、大変勉強になりました。そういうこともふくめて、その当時のことは、あれこれと今でも懐かしく思い出します。このような思い出話を続けていけば時間はいくら有っても足りなくなるでしょう。講演冒頭の思い出話のつもりでしたが、このあたりで一旦終わりにしておきたいと思います。

次に改めて、自己紹介めいたことを申し上げたいと存じます。それは、なぜわたくしがこんなにも長く、北京日本学研究中心に關心を持ち続け、その経営にも日本側の責任者の一人として長く関与してきたかということの背後にある、わたくし個人の思いをこの機会に話しておきたいからです。今までそれを話しておりません。しかし、この機会を逃せば、二度とそれを語るチャンスはなくなるでしょう。そういうわけですので、皆様方のお許しを頂いて、わたくしの個人史にかかわる一つの秘め事をお話しさせていただきたいと存じます。

ご覧のとおり、私は髪の毛も白くなった齢70年を超えた老人です。わたくしは8年ほど前までは、日本の東京大学という大学の教員として、研究・講義を行ってまいりました。フランス文学を専門に学んできたということもあって、その分野の担当をしておりました。フランス語の学習はもちろん、フランスの文化や、近代フランス思想に関する講義を担当しておりました。他方、私は空海という仏教僧の研究も秘かに行っておりました。空海は中国の唐王朝の後期、西暦で言いますと774年に生まれ、835年にいなくなった仏教僧ですが、当代随一の文人でもあり、思想家でもありました。先ほど少し触れた円仁よりは時代的には少し前の人です。今は私の空海研究についてお話し申し上げる場ではありませんので、ただ、その人物が日本の讃岐の国の出身であったということだけを言っておきたいと思います。もう一度、私自身のことに話を戻します。

私は1945年の1月に生まれました。日本とアメリカ合衆国との間に戦われたその「太平洋戦争」のさなかに、私は大阪市ですべての赤ちゃんと同じように「おぎゃー」の産声の声をあげて、この世界に誕生いたしました。私が生まれて間もなく、私の誕生した大阪市はアメリカ合衆国の最初の空襲を受けました。私は生まれてわずか2カ月後に、米国空軍の空爆という、とてつもなく危険な試練にさらされました。もちろん、生まれたばかりの赤ん坊に、空爆などということはわかりません。田舎の実家に命からがらに逃げ延び、それからずっと後になって、私が10歳になった頃だったでしょうか、母から、「あんたはアメリカの焼夷弾が降ってくる下で生まれたんだよ」、と私は何度も何度も聞かされるようになりました。「焼夷弾」というのは、地上にあるものをすべて焼き尽くすことを目的とする凶悪にして無慈悲な爆弾の名前です。

これからお話しすることは、生まれて二カ月後に、その「焼夷弾」の洗礼を受け、父母に抱かれて逃げ惑っていた一人の幼子(おさなご)の物語だと思ってお聞きください。

こんな古い話を皆様方の前で話すのはとてつもなく恥ずかしいことです。恥ずかしいというよりも、その戦争は日本が皆様の美しい祖国を不当に占領し、不当に支配し、不当に統治しようとしたことに始まる戦争の、終結部分に当たります。ですから、日本人の一人として、私は深い反省と謝罪の念をここで表明しなければなりません。しかし、現実の問題としては、私は生まれてまだ2カ月の赤子、その赤子はアメリカ空軍の投下する焼夷弾の雨にさらされ、奇跡のような幸運によって生き延びた一人の人間です。生まれるべきでは決してなかった時に生まれ、奇跡のような幸運に恵まれて、生き延びることができた一人の人間です。

アメリカ空軍の空爆の洗礼を受けることになった私は、天から落ちてくる焼夷弾の雨の下を、父母とともに逃げ惑うところから私の人生を始めました。私の人生は、今の日本ではもう誰もが忘れていて、あるいはそれを経験した人であれば忘れたいと思っている出来事、戦争の敗北から始まりました。アメリカ空軍の空襲は、私が生まれた時に始まり、その年の夏の広島・長崎の原子爆弾まで続きました。その8か月という時間のなかで、多くの人が亡くなりました。

私もその人たちと同じ運命を背負わされたかもしれないという思いは、今でも私の脳裏から消えることはありません。消えてはならないのです。なぜなら、それが私の生きていることの稀有な、ただ一つの証だからです。それは、何千何万の内の一つという、稀有な幸運によって生き延びることができた命です。それを私は今まで、70年わたって生きてきました。その思いは私の人生を通じて消えることはありません。こうして70歳になって、皆様の前でそのことを話しているということの幸せが、今は一入強く感じられます。

その稀有な幸運に恵まれた、私と一つの命が幼少年期を過ごしたのは、瀬戸内海に面した「西の庄」という田舎町です。私は今もそこに住んでいます。瀬戸内海という美しい内海に面した町です。戦争のおかげで、その故郷(ふるさと)の地が私に与えられたのです。その故郷は、瀬戸内海を見下ろし、標高千メートルほどの讃岐山脈という穏やかな山地を背にしています。その風景は、少し大きくなった小学生の私には、とても美しく見えました。その風景の中で、間もなく訪れる死まで、私は満たされた思いで生きております。

その穏やかな瀬戸の同じ海風を受けながら、そして同じ讃岐山脈の麓の農村で生まれた、私の愛してやまない一人の日本人、大平正芳は生まれました。私より35歳年長ですから、私の大先輩に当たります。

私が本日の基調講演の題目として取り上げるのは、その大平正芳という人物です。戦後の陰しい困難な中日関係において、最も重要な位置に身を置き、それを主導してきた一人の人物への心中深く秘めてきた敬愛の念と申しましょうか、その人

物への今も断ち難い私の尊崇の念を、皆様にお伝えしておきたいのです。中日国交回復を周恩来総理とともに実現した日本国外務大臣大平正芳です。しかし、私が話したいのは日中国交回復の立役者としての大平正芳外務大臣の業績ではありません。大平正芳という人物の生涯を支えていた内なる思いについて、お話し申し上げたいと思っています。

話は突然変わりますが、陶潜という有名な詩人がおります。字は淵明です。紀元4世紀の中ごろ、今から1700年以上も昔に生まれ、紀元427年に亡くなっています。今から見れば大昔の詩人です。現実には存在しない理想の村とそこでの平和な生活を描いた「桃花源記」という詩を残したことでよく知られています。その詩人が書いたもう一つ有名な詩に、「帰去来之辞」という詩編があります。とても有名な詩で、文学に少しでも関心を持つ人なら日本人の誰でもが知っています。もちろん、中国で陶淵明を知らない人はいないでしょう。

その詩は、次のような言葉で始まっています。失礼ですが、日本式の音で読ませていただきます。

帰去来兮、田園将蕪胡不歸

(き・きょ・らい・けい、でん・えん・しょう・ぶ・こ・ふ・き)

日本語で読み下しますと、次のようになります。

帰りなむ、いざ、田園まさに蕪(あれ)なむとす、なんぞ歸らざらむ。

現在の日本語に翻訳すれば、

さあ故郷(ふるさと)に帰ろう、わたくしの故郷は雑草に覆われ、荒れ果てようとしている。どうしてその故郷に帰らないでいられるだろうか？

陶淵明のこの詩を引用したのは、まず第一には、他でもなく私自身がこの詩をとても好きだからです。中学生の頃、先生が教えてくれたのですが、その後長い年月が過ぎ、定年退職の日が近付くにつれて、陶淵明のこの詩句がわたくしの頭の中に浮かんでは消え、消えては浮かぶようになりました。

特に、「田園まさに蕪(あれ)なむとす」という一句は、何度も何度も繰り返して、私の頭のなかを駆け巡るようになりました。この詩句に煽られて、大学の仕事が終われば、長く離れていたふるさとに戻ろう、そう私は決心しました。定年退職後に、私に田舎の故郷に戻る決心をさせてくれたのは、この詩句でした。大学の同僚たちは、わたしのその「なんぞ歸らざらむ」という帰郷の決心を、不思議なことのように見ておりました。わたくしの父も母も、わたくしが定年退職するよりも前に亡くなっていました。ですから、わたくしは故郷に帰っても、年老いた父母を支えるという務めはありませんでした。故郷の家には、誰もいなかったのです。それでも私は故郷の家に帰ろうと決めておりました。私の故郷の田園は、「まさに荒れなんとす」どころではありません。既に荒れ果てていました。その荒れ果てた故郷の風景を

見て、私はひどく意気消沈しました。と同時に、やるべき仕事が私の目の前に立ち現れてきました。そこで生きてゆくための準備です。陶淵明と同じように、住居をしかるべく修繕し、あれ果てた耕作地を本来のあるべき状態に戻すことです。

瀬戸内海に面し、城山(きやま)という7世紀の古代山城(やましろ)のあったその山の麓にある、古い隠れ家に私は妻とともに住んでのんびりと暮らしています。そこで、自分の好きな本を読み、時々自分も本を書いて、暮らしています。そういうわけで、わたくしは皆様方に役立つようなことを何か話しできるような能力も資格も、そのための話題も実は持ってはいないのです。

しかし、これから私が陶淵明の詩編に啓発されつつ、語ろうとしていることは、大平正芳という人物の秘められた真実なのです。確かに大平さんは、戦後を代表する卓越した日本の政治家です。戦後日本の政治家のなかでもっともすぐれた人物であったことは間違いありません。そしてまた、日中国交回復の偉業を成し遂げた外務大臣であり、日本自民党内の拙劣な政権闘争の犠牲者でありました。

私の大好きな、今も深く敬愛する大平さんは、そのような範疇に収まる人物ではありません。卓越した外交官であり、あるいは日中国交正常化を果たした外務大臣であり、あるいはさらに不運の宰相として政権闘争のうちに倒れた不運な政治家でもあります。どんな時、どんな場面でも、謙虚さを失うことなく、決して虚言を吐かない敬虔なキリスト教徒として、そして子供たちとさえも自由に話し合うことができる汚れなき精神を持って生涯を生きとおした、そのような一人の人間です。そしてまた、心のこもった文章で人を動かすことのできる、詩人の魂を持つ文章家であった、大平正芳という名の一人の人間なのです。

大平正芳は、作家の一面を持っています。自分の考えや感じたことを、それに相応しい言葉で表現することができる人です。大平さんは、絶えずメモを取る人でした。思いついたこと、感じたこと、読んだこと、教えられたこと、すべてを一度はメモ帳に写し取り、必要となればそのメモを文章として定着させることができる作家でした。

それらの文書を私たちは今では容易に読むことができます。まず第一に、没後二年という早い時期に、『大平正芳回想録』二巻が刊行されております。その「資料編」の巻には、かなり多くの文章が収録されています。その巻の巻頭には多くの写真収録されており、大平さんの生前の姿を如実に偲ぶことができます。

さらに現在では、講談社から『大平正芳全著作集』全7巻が出版されています。これはセンター図書館にもあるはずです。大平さんの書いた文章が類別に編集されて収録されています。第7巻には、活字にはなっていない未刊行の日記・メモ・覚え書きなども収められており、大平さんの広大な文章世界が展開されています。文人大平正芳のあらゆる種類の文章を、今では誰でも読むことができます。それはいわば、活字化された大平ワールドなのです。

私が特に皆様方に注目して頂きたいのは、その中に収められた談話であり、特